

隠された歴史

バレン遺跡についての古文書などの資料は、一切ありません。

禁教令により隠れた活動を余儀なくされた隠れキリシタンの人々にしてみれば、証拠の残る文書を残さなかったのも当然のことだといえるかもしれません。

人里離れた山奥で暮らしを営むことが、江戸幕府の手から逃れる手段であり、バレン山にその痕跡が少なからず残っていることは、つじつまの合うことだと推測できます。そして、時代が進み、いつしか「ばてれん」という呼称だけが残ったと考えられます。

当時の痕跡を残すのは、バレン山の中にある通称「猿楽※跡・すもうとり場跡」と呼ばれる直径20メートルをこえる土で築いた円形の壇です。この土壇で、説教が行われたという人もいます。

世俗的な猿楽・すもうなどの名称で呼ばれたのは、本来説教場を使用していたことを隠そうとしていたゆえんかもしれません。

※猿楽…古代・中世の芸能。こっけいな物まね芸の総称で、能や狂言の元となった。

出土した遺物の謎

バレン遺跡からは、数々の出土品もありました。遺跡から出土

した品々は、昭和63年に町の重要文化財に指定されました。天目茶碗や青磁の大皿、伊万里青磁の筆皿、ギヤマンの瓶。どれも当時を物語る、とても貴重な遺物です。

中国研蓋で焼かれた天目茶碗と青磁の大皿が出土した意味は大きいといえます。年代は、早くとも13世紀後半と推定され、鎌倉・室町時代のものといわれています。誰がどのように、いつ邑楽町に持ち込んだのか、だれが使っていたのか、いまだ謎ですが、注目すべきは、バレン遺跡から出土したという事実です。

禁教令の前か後かで話は変わってきますが、仮に隠れキリシタンが使用していたとするならば、高度な文化と知識を持った人々が暮らしていたことの一つの説明になるのではないのでしょうか。

ギヤマンの瓶にしる、もし江戸時代のものなら、当時の一般庶民が日常的にガラスの瓶を使用していたとは考えにくいことから、宣教師がもたらしたものと、想像を膨らませることもできます。

いずれにせよ、はっきりしたことは、分かっていません。推測の域を出ませんが、外国製の品々が出土したこと自体は、歴史的に大きな価値があります。

猿楽・すもうとり場跡 うっそうとした森の中に、その痕跡はあった



↑町文化財保護調査委員の大塚孝士さんに案内していただきました

※地形の変化などで以前にも増して、「猿楽・すもうとり場跡」の痕跡はなくなりつつあります。発見するのも容易ではありません。

前原と寺中の境にある「ばてれんばし」を渡ると、現在の邑楽中学校のあたりまで、深い森に覆われていました。中野字諏訪原のあたりがバレン遺跡です。今も雑木林の中には、通称「猿楽跡・すもうとり場跡」と呼ばれる、直径20メートルをこえる土で築いた円形の壇（周囲が高く中央にむかい凹地「皿」状の痕跡）があります。当時、この土壇の上で、キリスト教伝授が行われていたという人もいます。

物言わぬ遺物たちの
声なき声に耳を傾けることが、
謎を解き明かす鍵となる



ギヤマンの瓶

謎の瓶も出土

【町指定重要文化財】

出土した謎のガラス小瓶。聖水を入れておいた瓶だと、推測する研究者もいます。



青磁の筆皿

江戸時代に焼かれた伊万里青磁
【町指定重要文化財】 一般庶民ではない、かなり高度な文化人が、使用していた可能性があります。



←キリシタン墓石（小さくできていること自体に謎が秘められています）

【塚の最上部にあった墓】
キリシタン墓石
バレン遺跡からは、キリシタン墓石も出土しています。墓石高は約25cm、幅約12cm、厚さ約10cmの将棋の駒型墓石でした。表面には、朱色の十字架が薄彫りされていて、ほかに一切文字はありませんでした。

このキリシタン墓石は、「バレン塚」というところの、ちょうど頂上の土中に埋められていたという研究者もいます。

ところで、バレン塚とはいったいどこにあったのでしょうか。塚は、現在のちょうど邑楽中学校付近にあったそうです。戦後、木々が深く生い茂っていたバレン遺跡の開発計画が進み、一部を切り崩し、邑楽中学校が新設されることになりました。ちょうど体育館あたりの場所が「バレン塚」のあった所で、塚は古墳の上に築かれていました。

永い眠りから覚めた遺物

邑楽の歴史をひも解くバレン遺跡の出土品



①

【町指定重要文化財】

天目茶碗

県下にも名を轟かせる名品



②

天目茶碗は中国の研蓋（けんさん）で焼かれた逸品。大変貴重なもので、町指定重要文化財中、特に貴重な出土品で、鎌倉・室町時代のものでいわれます。【天目茶碗①】口径12.2cm、器高7cm、高台径4.5cm、内面の深さ6cm。高台はへらで切っており、釉（うわぐすり）の色は黒褐色です。【天目茶碗②】口径10.8cm、器高5.6cm、高台径4.3cm、内面の深さ5cm。高台は削り出し高台で、釉の色は黒褐色です。



天龍寺青磁

中国青磁の逸品

【町指定重要文化財】

口径26cm、器高4.8cm。深さ2.5cm。色調は、くすんだ青緑。中国の龍泉窯（りゅうせんよう）で焼かれた青磁と考えられています。

中世陶器の壺

貴重な古銭も多量に出土

【町指定重要文化財】

常滑焼（とこなめやき）の壺で焼かれたのは16世紀初め。この壺の中から古銭が17,991枚出土。



【バレン塚出土】

如意輪観音墓

墓石には次のような戒名などが、刻まれています。

登善蓮慶信士 宝永元甲申天
七月十六日
涼月知光信女 元禄十五年午年
六月九日

夫婦の墓ともいわれます。宝永元年は一七〇四年。元禄十五年は一七〇二年です。

信徒と思われる墓には、「年」の代わりに「天」と彫られた年号（天年号）を使うという人もいます。この墓石にも天年号があり、隠れキリシタンの墓石だとする説があります。

「慶」の文字の隣に、点「丶」が見えることから、「」が天を示し、天は「あま」とも読めることから、天の文字を「アーメン」と読む隠れキリシタンの墓石だろうと推定する研究者もいます。



←「丶」の文字が刻み込まれた戒名





今では、歴史がたどれる散歩道。

バテレン山付近に続く、のどかな小道

●参考文献

『続・あしもとに故郷』厚川小一著（2012）邑楽町

『関東平野の隠れキリシタン』川島恂二著（1998）榊さきたま出版会

『邑楽町誌』邑楽町誌編纂室（1983）邑楽町

明王院の延命地蔵

赤堀明王院の延命地蔵の背には、何かを差し込むための加工がしてあります。これは、何を意味するのでしょうか…。



はたして、十字架を差し込むための加工なのか…



神光寺の延命地蔵

中野地区の神光寺の参道入口に延命地蔵があります。その4片の花弁台座が十字架のように見えるといいますが…。真相は、分かっていません。



↑延命地蔵の台座



Report ●取材を終えて

現代の価値観だけでは
解明できないバテレンの謎

今回の特集では、バテレン遺跡を取り上げました。

地名の由来から始まり、出土した遺物から見える時代背景、そしてこの地での隠れキリシタンの暮らしの痕跡を、探りながらの取材でした。

バテレン山、「ばてれんばし」といったような、隠れキリシタンに由来する名称は、今も地域を特定した呼称の地名として残っています。



邑楽町文化財保護調査委員
大塚孝士さん（十三坊塚）

Interview ●町の歴史をひもとく

隠れキリシタンは、
誇り高い文化を持った
人々だと、私は思います

キリスト教は、邪宗門として退けられ、宗門改めや寺請制度によって徹底的に排除されました。発見されると見せしめのため、磔にされ容赦なく処刑されました。迫害の歴史といっても過言ではありません。

隠れキリシタンは、地域の中に同化することなく、一線を画していたと思います。それはとりもなおさず、自分たちの宗門を守るための行いだったのです。

ですから、その隠れ墓として深くて暗いバテレン山へと、身を潜めたのかも知れません。

各地域に点在する
隠れキリシタンの痕跡

邑楽町の神社仏閣には、キリスト教の十字架（クルス）が刻み込まれたと思われる仏像や墓石が点在しています。

光善寺の神明宮の庚申塔の宝剣にラテンクルスを見ることが出来ます。よく目を凝らしてみないと発見することはできません。

前原のかつてこぶ観音に通じていたといわれる観音道の地蔵菩薩の錫杖にも、ラテンクルスを見ることが出来ます。

最近になり、十三坊塚南にある庚申塔に「仙元宮 やま」と刻まれていることを発見しました。「仙元宮」とは浅間神社のことで、「やま」とはバテレン山を指すのではないかと、私は推測しています。

赤堀明王院の延命地蔵の背には、何かを差し込むための加工が施してあります。推測ですが十字架を差し込む穴なのではないかと思っています。

遺跡から導き出される
教徒たちの素顔とは

バテレン遺跡からは、中国製の天目茶碗と青磁の大皿が出土しています。出土品自体は中世のもの

ですが、バテレン遺跡で発見されたことに深い意味があると思います。当時の隠れキリシタンの人々が使用していたと仮定するならば、驚くべきことです。

貿易によってもたらされる、こうした品々を内陸のしかも邑楽町のバテレン山まで運んできたとなると、禁教令下で独自のネットワークとルートを持っていたと推測することが出来るからです。

そう考えると、当時奥深いバテレン山で暮らしていた隠れキリシタンは、高い文化意識を持ち、広い見識を兼ね備えた、最先端の情報を得ることのできた人々だったのではないのでしょうか。



錫杖にラテンクルスらしきものが、彫られているのが確認できます

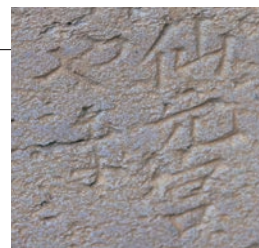


地蔵菩薩

その昔こぶ観音に通じていたといわれる前原の「観音道」の路傍にある地蔵菩薩

十三坊塚南の庚申塔

●道しるべと併用の庚申塔
十三坊塚地区南の庚申塔には「仙元宮 やま」という文字がうっすら見えます。「やま」は、バテレン山を指しているのでしょうか。



↑「やま」の文字が見える



神明宮の庚申塔

光善寺の神明宮境内の庚申塔の宝剣には、ラテンクルスのようなものが深く刻まれています。



宝剣の刀身先端部分に確認できます

